台大日本語文研究第 36 期
2018 年 12 月，頁 47-68
2018-09-30 收稿，2018-11-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2018.36.47

野上彌生子的台灣觀點研究
—以〈台灣〉為探討中心—

黃翠娥*

摘要

野上彌生子於 1935 年接受旅居台灣的日本友人—殖民官員的夫人—之邀，帶著長子前來參加日本統治台灣四十週年慶祝活動。當所搭乘的「蓬萊丸」接近基隆的時候，彌生子發出「有一種千里尋覓之後，終於看到房子門柱的一種令人安心與懷舊的感覺」的一份感動。然而在往後的 20 天的旅程中，原本的安堵與懷舊的情感，因經歷各種相遇與交流之後，被迫轉為面對現實，開始興起了諸多新的思考。其中包括，透過在蕃界的所見所聞，而開始對總督府理蕃政策產生疑問。另外，也發現內地人通常不會到大稻埕、龍山寺等本島人所居住的區域；在南部也曾經遇到在婦女團體的餐會上，舉目所望都是日本婦女，熟識的相關的台灣女性都未獲邀請。另外，台灣某名人談到自己的故鄉時指的是大陸某省...等等。由這些經歷，彌生子很自然地體悟到內地人與台灣人之間有極大的隔閡，台灣並未完全地日本化。除此之外，彌生子對於內地人在台灣經濟狀況不佳的狀況，以及婦女該有的舉止、思想等等也都一一提出針貶之言。

關鍵詞：野上彌生子、始政四十周年、理蕃政策、台湾觀點

* 輔仁大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Discussion of Yaeko Nogami's perspectives on Taiwan -Based on the *Taiwan*

Tsui-O Huang*

Abstract

In 1935, Yaeko Nogami accepted the invitation from her Japanese friends, who were living in Taiwan at that time, to attend the fortieth anniversary ceremony of Japan's rule over Taiwan. She came to Taiwan with her oldest son. When her ferryboat, the Houraimaru, approached the port of Keelung in Taiwan, Yaeko got excited and said: "It is like you came all the way from a distant place and you finally found house's gatepost, and at that moment , you just had a sense of security, and the nostalgia just came flooding in". But, during the next twenty days'journey, after various encounters and personal experiences, Yaeko was forced to face reality, which led to many new ways of thinking. This included what she saw and heard in the aboriginal community. Yaeko began to question the Governor-General's aboriginal policy. Also, Yaeko was aware that the Japanese people did not want to visit the local areas --Dadautsun, Longshan Temple and other areas where the local Taiwanese resided.When she travelled to the south, at a women's dinner party, all the attendees were Japanese women, while the Taiwanese women, who were friends of these Japanese women, were not invited. And at another party, a celebrity figure of Taiwan stated that his hometown is a province of mainland China. From these experiences, Yaeko realized that there was a great gap between the Japanese and the Taiwanese people which could only mean that Japan did not completely and successfully rule Taiwan. In addition, Yaeko also made a statement about the poor economic situation of the Japannese people in Taiwan,

* Professor, Department of Japanese Literature, Fu Jen Catholic University

臺灣大學學術期刊資料庫

and of the behaviors and thoughts of women.

Keywords: Yaeko Nogami, the fortieth anniversary of Japanese rule, aboriginal policy, Taiwan viewpoint

臺灣大學學術期刊資料庫

野上彌生子の台湾観について
―「台湾」を中心に―

黃翠娥*

要旨

彌生子が女学校時代からの友人の長官夫人の誘いで、長男と同行で台湾始政四十周年に当たった年の昭和 10 年に台湾を訪れた。蓬莱丸が基隆の港に近づいてから、彌生子はすでに心が躍っている。「なにか遥遥とたづねて来た家の門柱を見つけたやうな安心ともの懐かしさを感じ」る。しかし、この 20 日の台湾の旅で、様々な出会いによって、元の安心感と懐かしさが次第に現実感を直面させられたことによって、いろいろと思索するようになった。それは蕃界での見聞を通して、総督府の理蕃政策の問題点及び在り方についての感想があったり、また、大稲埕、龍山寺という本島人の居住地域では内地人がなかなか入らないこと、関係者の台湾人を排除し、日本人ばかりの婦人団体の食事会、さらに本島人の自分の故郷を大陸の某省にすることなどから、内地人と本島人とは融合が欠如したこと、及び、台湾はそれほど日本化されていないことなどを実感した。さらに、内地人の経済状況と婦人の在り方などにも関心を持った。

キーワード：野上彌生子、始政四十周年、理蕃政策、台湾観

* 輔仁大学日本語文学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

野上彌生子の台湾観について
—「台湾」を中心に—

黄翠娥

一、はじめに

野上彌生子[1](1885-1985)は 日本の台湾支配四十周年に当たる年の昭和 10 年(1935)に台湾を訪れた。蓬莱丸で、10 月 20 日に基隆に到着し、11 月 10 日大和丸で帰国するという約二十日間の台湾旅行である。総督府の招聘によって来た多くの文人[2]と違って、彌生子は明治女学校時代からの友人の「平塚さん」の誘いで来台したのである。[3]しかし、「平塚さん」は総督府の総務長官平塚広義の夫人であるため、私人の旅でありながら、終始総督府の招待を受け、旅程や各地の案内者はすべて総督府の文教局を通してアレンジされた。

この台湾旅行については、彌生子は台湾旅行中の 1935 年 10 月 31 日、『読売新聞』に「台湾より」を、11 月 7 日に「蕃童」を発表した。1936 年 4 月には『改造』に「台湾遊記」と題して台湾での見聞を発表した。また 1942 年に拓南社により夫の野上豊一郎との共著の旅行記『朝鮮・台湾・海南諸港』を出版した。これは台湾旅行をまとめたものである[4]。

---

1 明治、大正、昭和の三代百年を生き抜いて、創作の筆を執り続けた野上彌生子は大分県にある醸造業の家の長女として生まれた。三人の男児を持ち、理解ある優しい夫--東大英文科出身で、漱石門下の野上豊一郎--と営む中流知識階級家庭の主婦として生きた彌生子は「書斎派母親作家と命名された」(「野上彌生子」、『日本女性文学史』ミネルヴァ書房 p.127、2005)

2 1929 年の徳富蘇峰、1930 年の林芙美子、1934 年の北原白秋など以外は、特に決戦体制に入った時期に文芸講演会のために台湾を訪れた。中村地平、真杉静枝、内田百閒、広津和郎、窪川稲子、村松梢風、豊島与志雄、浜本浩、菊池寛、吉川英治、火野葦平、庄司総一などが代表的な文学者である。

3 1935 年 10 月 12 日の「お手川金次郎」への葉書で、「私の台湾旅行と云ふ新計画がはじまつて一さう忙しくなつたわけです。これは勿論平塚さんの誘引で、(中略)素一を連れて出掛ける事になりました。台北では平塚長官邸のお客さんになります。」と書いてある。(「書簡」、『野上彌生子全集』第II期第二十四巻、1991.1、p .261)

4 本論のテキストは岩波書店出版の『野上彌生子全集』第十五巻(1980.7)の中の「台湾」である。彌生子はその後の 1946 年に台湾在住する日本人の親友

臺灣大學學術期刊資料庫

彌生子の台湾旅行については、まず瀬沼茂樹が『野上彌生子の世界』において、1 ページでしかないが、彌生子の来台の動機やいくつかの台湾への観点を紹介している[5]。石月静恵は「知識人女性の台湾訪問と台湾認識」[6]で林歌子、林芙美子、北村兼子、佐多稲子及び野上彌生子の五人の女性作家を取り上げ、それぞれの台湾認識を紹介している。渡邊ルリは彌生子が花蓮・大武で出会ったアミ族・パイワン族出身の公学校教師のことを調査するために、彼らの子孫を取材し、当時の彌生子との巡り会いを明らかにしようとした[7]。台湾出身の研究者であれば、1991 年陳藻香が『野上彌生子の台湾観-紀行『台湾』を中心に』[8]において、彌生子の旅程、登場人物及び地名などについて詳しく考証した。陳萱の「野上彌生子の植民地台湾の旅—感覚描写を通じた台湾認識--」[9]は、特に彌生子の、漢民族の本島人に対する感覚的な描写を分析し、彌生子の台湾認識の輪郭を明らかにするものである。

これらの研究は本論に貴重な示唆を提供してくれたが、本論は、彌生子の台湾観点の特徴のほかに、特にその背後に潜んでいる彌生子特有の理念を探究しようとするものである。

二、愛情の溢れた眼差し

彌生子の台湾旅行の旅程[10]は以下の通りである。長男の素一との同行で、10 月 20 日に基隆港に到着した後、まず台北市内を参観する。そして 2 日後、宜蘭線で蘇澳まで行き、また、蘇澳から花蓮ま

の生活を描いた「砂糖」を発表し、1954 年に『婦人公論』に「台湾の帰趨」を発表し、台湾の事に関心を持ち続けた。

5 瀬沼茂樹『野上彌生子の世界』(岩波書店、1984.6、p.127)

6 石月静恵「知識人女性の台湾訪問と台湾認識」(桜花学園大学人文学部研究紀要　第 8 号、2005)

7 渡邊ルリ「一九三五年の台湾と野上弥生子—花蓮・大武の公学校教師との出逢い」(『戦間期東アジアの日本語文学』、勉誠出版、2013.8)

8 東呉大学日本文化研究所修士論文。1991.6

9 陳萱「野上彌生子の植民地台湾の旅—感覚描写と通じた台湾認識--」(『比較文学研究』96、東大比較文学会、2011.6)

10 彌生子の来台の日程は『台湾日日新報』に 1935 年 10 月 24 日から 11 月 8 日まで報道された。

臺灣大學學術期刊資料庫

での臨海道路を行った。バタカン蕃社、タロコ、花蓮港、薄薄蕃社を見学し、台東を回り、南にある四重溪と最南端の鵞鑾鼻へ向かい、そして、西海岸を北上した。西海岸の旅は 10 月 28 日の台南出発から始まり、そして、烏山頭、嘉義、阿里山、日月潭、埔里、眉溪を経て霧社事件の舞台である霧社を回った。さらに台中神社、台中公園を見学し、霧峰の林家を訪れ、台北に戻る。台北では、11 月 6 日に、愛国婦人会台湾本部主催の座談会に出て、同 9 日に台北第三高等女学校で講演をして、翌日の 10 日に台湾を離れた。

彌生子が台湾を訪れた時期を含む同年 10 月 10 日から 11 月 28 日までの五十日間にわたって、「始政四十周年」記念行事として台湾博覧会が行われた[11]。テーマは「南の守護島・文化と躍進の台湾」で台湾の南進基地としてのイメージを強く宣伝したものである。しかし、この大きなイベントについては、彌生子はそれほど関心を持たなかった。遊記の冒頭には、施政四十年の記念博覧会の招待客らしい紳士連や見物人らしい内地からの旅客や博覧会のためにわざわざ帰ってきた臺灣服の若い娘たちが同船者だという記述がある。また、高砂族青年団代表の懇談会が開催されるため、タイヤル、ツォウ、サイセット、ブヌン、パイワン、ヤミ族などの青年が台北に招待されたという記述も残してはいる。さらに、遊記の最後に彰化を経て台北に帰りついたら、宿にしている長官官邸の後はすぐ博覧会の会場で、「演芸会の鳴物など手に取るやうに聞こえて来た。日本の植民政策の四十年の結果を、その騒ぎが私に新らしく思ひ廻はさせ、帰途に、もし出来たら朝鮮から満州も見て来たい願望に激しく捉へられた。」(p.151)という感想も述べてはいる。しかし、以上の

[11] 博覧会は日本内地、本島、朝鮮、満州国、南樺太、南洋庁、中国福建省からの出展によって、盛大に行われた。全期間中の出展品目数は三十万点以上を超え、入場者総数は 276 万人ぐらいと発表された。特に、当時の台湾最大の商業地域の大稲埕においては、博覧会の分会場として南方館を開いた。シャム(タイ)館、フィリピン館、福建特産館などに構成された。当時の南洋庁及び各支庁(サイパン、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペ、ヤルート)と東南アジア地域(インドシナ=ベトナム、マレー、シンガポールなど)に関する展示が中心になる。(国会図書館デジタル資料「始政四十周年記念台湾博覧会誌」昭和 14 年)

臺灣大學學術期刊資料庫

記述を除けば、展覧会の内容については、彌生子は何も触れてはいない。むしろこのイベントよりも台湾という異文化に興味を持っているようである。

彌生子は台湾到着の直前から、「波の上の島影に、なにか遥遥とたづねて来た家の門柱を見つけたやうな安心ともの懐かしさを感じる」(p.72)と、すでに台湾に親しみを感じた状況が見え隠れしている。そして、上陸してから、色彩的な台湾風景を多くの賛美の言葉で紹介し始めた。「厖大な石盤色の塊まりのような」水牛と、その背中に悠然と停まっているあざやかな真っ白い白鷺という組み合わせ、また、赤紙の聯を貼りつけた家の前に座って赤ん坊に乳を飲ませている若女房、熱帯の土地の長い雨期と、強烈な日光を避けるために設けられた亭子脚などがすべて極めて彌生子を魅了したようである。特に本島人のにぎやかな居住区域であった大稲埕については、「童話めいた左右の廻廊はますます妖しげにも美しい異国的なものになった。」(p.78)と描写しているように、彌生子にとっては、すべてが新たで、異国的で、珍らしい風景であった。三年後、香港への旅で、「先年の台湾旅行で親しんだ鳳凰木や、仏桑華や、朝日かづら、クロトンを再び眼にしたことも、なにか久しぶりの友達にめぐり逢つた念ひでありました。」[12]というように、台湾に深い感情を抱えているようである。

そして、平塚夫人が見せたいと思う出来あがった台湾よりは、まだ出来あがらない台湾や、その途中にある台湾が見たかったと語る。その理由は、ずっと官邸のお客さまになって、東京と変らない生活を愉しんだら、旅行の意味が失われてしまうし、冒険的なことが生ずる旅行はおもしろいからだという考えによったものである。したがって、台北に 2 日間泊まってから、素早く花蓮に足を運んだ。そして蕃地の見学のために、闇の中の山道をバタカン(蕃界)まで三里も歩く苦労をした。彌生子は蕃地では、まず、原住民の外観に注目

[12] 「海外からの便り　香港」(『野上彌生子全集』第十六巻　1980.11、ｐ.33)

臺灣大學學術期刊資料庫

し、多くの美文で描いた。それは正に一つ一つの芸術品を丁寧に鑑賞したようなまなざしだと言える。そして、このような原住民の容貌に対する讃辞はまた 10 月 23 日の、知人への葉書にも出てきた。「バタカンといふ蛮社のある山奥の宿泊所に泊まり蛮人たちの生活を見ました。これはタイヤル族といふので、悉く明眸皓歯と云つてもよい可愛いかほをしてをります。」とある[13]。

さらに、霧社にも足を運び、霧社事件の時、官憲の味方をしたパーラン社を訪れ、「小家の入口をはひつた私は、出る時には隣人のもとを去るやうな親しさに充たされてゐた。まことにこの蕃社に限らず、台湾に来てもつとも強い魅力で私を引きつけたのは彼らである。東京を離れて、どこか遠いおもしろい土地にしばらく住んで来い、と云はれたら、私はこの蕃地を一番択ぶだらう。」(p.147)と、蕃地に愛着を感じたように記した。このような、台湾に好意の念を持っている描写は次の何か所かからも見られる。例えば、台北の大稲埕の風景についてであるが、「いつたいの人人が昂揚と愉快さうで、路ばたの高い叫ぶやうな話ごゑでも笑ひでも、かけ構ひなく、無遠慮で、さも自信ありげに、振舞つてゐる態度であつた。同じ植民地ながら朝鮮の住民たちについて聞いてゐたものとはあまりにも著しい相違に...(後略)」(p.79)、そして、烏山頭から出発し嘉義に向っている自動車が早いスピードを出して町を駈け抜けると、地元の人々は急いで避ける。「しかし、その急ぎ方も征服された民族らしいあわて方ではなく、反対になにか図太く悠然としたものがある。これらの場合に限らず、内地人にたいする時のこれが彼らの共通の態度らしいのが、台北で感じた以上に旅行に出て見て一層眼についた。これはもつとも意外な驚きであつた。」(p.131)というような平和に満ちた台湾像の描写である。

以上述べて来たように、彌生子は正に暖かい眼差しで台湾を見ているのである。むろん、彌生子のこの暖かい眼差しは当時の訪台の

[13] 「書簡」(『野上彌生子全集』第II期第二十四巻、1991.1、p.261)

臺灣大學學術期刊資料庫

文化人のそれとはさほど相異はしていない。むしろ、次節における議題は彌生子のこの旅での大きな発見だと言える。

三、彌生子の懸念

彌生子は台湾のことをすべて従順に認めているとも限らない。鋭く、理知的に当時の問題点を指摘した一面もある。即ち、台湾支配四十周年を迎えている最中で、彌生子は観照的に日本統治の問題点を見出して、自分の気がかりを吐露した。

『台湾愛国婦人新報』に掲載された11月6日の座談会の記事では、彌生子が関心を持っていた問題点が載せられている。「野上女史は経済的生活に入らんとする蕃人の今後の問題、若き本島人男女青年の新旧思想問題に於ける悩み、台湾在住内地人の生活振り、未婚女性の結婚問題等について極めて素直な適切な意見をはかれ、私共台湾女性をして考ふるべき多くの問題を提供された。」[14]として、極めて理知的な論点を提示したと述べられている。「台湾」の内容に照らしてまとめれば、以下の四点となる。

(一)原住民の経済生活の変化

本来山野で自由に食べたり寝たりする原住民であるが、「蕃女」が「飯盒」を使用するようになり、博覧会見物に出る原住民の子供たちが身に着けた「新しい学校帽や、霜降りの服や、ズックの鞄」が金なしでは手に入らないことを思うと、「蕃人の、とりわけ高地蕃の経済生活の上におもむろに広がらうとしてゐるらしい一つの陰影は、ほんの行きずりの旅人にも考へ及ばれないことではなかった。」(p.97)と懸念を抱くようになった。また、「タロコ娘の舞踊」では、視学のお伴で原住民の踊りを見た時の感想であるが、

> タロコ娘たちが、かうした昔ながらの粟搗踊や収穫の祭の踊とともに、蓄音機と使つて土佐甚句からおけさまで踊つて見せたのにはびつくりした。...今のうちに彼らの古来の舞踊

[14] 「野上彌生子女史の座談会」(『台湾愛国婦人新報』1935年11月号、No.073、pp.17-18)

臺灣大學學術期刊資料庫

> や歌詞も、ぜひ保存の方法を講ずべきではないだらうか、と私たちは云つたが、台湾の文化的施設はまださういふしごとをするまでには行つてゐないらしい。 (pp.103-104)

即ち、彌生子が気にしているのは、生活の変化によって、知らず知らずのうちに伝統的な文化が崩れていくのではないかという点である。具体的な懸念の内容は以下のようである。即ち、金がなくてすんだ生活が金の要る生活に変ろうとして、しかも、要るだけの金を手にする方法と、能力に欠けている場合に生ずる必然の現象が、蕃人の社会にも現れようとしているのである。特に地理的に不利な高地蕃が、狩猟のえものや、火耕の収穫では新しい経済生活を充たされなくなった時の運命は果してどうなるのだろう。あのタロコの美しいイヤンラハンがいつか女給さんにならないと誰が保証し得るであろう。またあの渓谷の奥から嬉嬉としておりて来た蕃童たちや、このタコバコバンの少年らが、どこかの会社の職工や自由労働者になるだろうと、いろいろと蕃人のこれからの生活状況に危惧の念を抱く。これについては、後の 11 月 6 日の台北の教育会館三階で開催された座談会においても、さらに詳細に自分の不安を語っている。この座談会では、彌生子は最初に台湾で最も強い印象をうけたのは蕃人であり、蕃人と言えば、極めて詩的に、非常にロマンチツクにひびくものだと紹介してから、早速自分の不安を述べ始めた。

> そこには蕃人達が土地を人々の好意によつて、田畑を開墾する事を教へられ、米を耕り、畑もは甘薯、馬鈴薯をうえて居る。そして次第に金の有難さを知る様になつてゐる。もう平地では蕃人達がカフエーにゆき娘達は白粉をつけ、粗末な蕃布を巻く事をきらい、袖のある服を欲しがり、甚だしいのには、蕃丁に嫁入りする事をさへ嫌がると云ふ[15]。

という。即ち、原住民に愛情、好意を持っているからこそ、彼らの経済に左右されていくことを想像して不安がってしまうのである。

それから、「蕃童」では次の出来事にも触れた。台東の公学校の

[15] 蓮池親子「野上彌生子女史は台湾を斯う視た」(『台湾婦人界』、1935.12、p.10)

臺灣大學學術期刊資料庫

寄宿舎を参観に行った時、部屋の机の上にある雑記帳の「内地は偉い人ばかりであります」という文句が目に入った。彌生子はこれに対して「それは教師の書かした作文ではなく、蕃童の真摯な感懐であるらしいことが瞬間その古びた雑記帳を手から離しえなかつたほどの、一種の悚然たる感じを私に与へた。」[16]と感想を述べた。ここからも、彌生子が植民地政府の、蕃人に対する教育のあり方に疑問を持っていると読み取ってよかろう。

原住民に対しては、徳富蘇峰(1929)も懸念を持っていた。即ち、台湾面積の四分の三以上を、十万人足らずの生蕃人に任せた結果は、蕃人は山を荒らし、水源を枯らし、洪水氾濫の素因を作ってしまったと、原住民の耕作文化(及びそれに対しての当局の態度)を批判した[17]例があるが、佐藤春夫(1920)のように台湾山地の統治現場を観察し、近代日本の文明と植民地支配の現実を批判した例もある[18]。佐多稲子(1942)なら、台東の映画館で高砂族の青年団が天皇陛下という言葉が流れると、館内には、ざざっと、一斉に足元を揃えた靴音がした場面を目撃した途端、感想を記した。それは、古い絵のような土着民の固有の生活ぶりと無理に戦場へと動員されたことを対比させることを通して、被統治者への不憫な感情を現しているものである。[19]これらは原住民の状況により関心を持っていた発言である。彌生子の場合もそれに類似している。しかし、彌生子の見方の特徴は、原住民のこれからの生活が変化していくことに対する懸念が強いということである。彌生子の来台の時期は上述したように台湾統治の実績を強く示そうとした時期で、また、数年前に霧社事件が起きたこともあって、原住民に対する管理策の変更などがより進んでいる時期であるため、それによって、「現代」的な要素がたえず蕃地に侵入するようになった。この新しい経済状態によって、本来の

[16] 「蕃童」(『読売新聞』、1935.11.7)
[17] 黄翠娥「徳富蘇峰の眼差しと台湾の記憶--『臺灣遊記』をめぐって」(『台大日本語文研究』 33、台湾大学日本語文学科、2017.6、pp.81-102)
[18] 黄翠娥「佐藤春夫の批判精神－日本統治時代の台湾ものを中心に－」(『日本語日本文學』第 35 輯 輔仁大学日本語文学科 2010.7、pp.144-161)
[19] 佐多稲子「台湾の旅」(『佐多稲子全集』第三巻、講談社 昭和 53.2、P.344)

臺灣大學學術期刊論文授權

純粋な原住民文化が崩れていくのではないだろうかと彌生子は不安を抱くようになったのである。

彌生子のこれらの観点からは、彼女のヒューマニスティックな一面がはっきりとにうかがえるだろう。ただ、彌生子のこのようなヒューマニスティックな観点の特色は何であろうか。1938 年の岩波発行の「図書」で、それぞれの星座にそれぞれの光輝があるように、各々の民族、各々の国家に他の追従を許さない特長と優秀があるというような記述が残る。即ち、当時の台湾は日本の植民地でありながら、彌生子は依然として、その内部にある各々の存在及びその本来の価値を肯定的な眼差しで見ているのである。

（二）内台融合の問題

日本と他民族との融合問題はすでに多くの文学者が関心を持ち指摘しているところである。佐藤春夫はどのようにすれば日本と中国との融合がうまく遂げられるかといった、いろいろな建言も出している[20]。また、北原白秋も「華麗島風物誌」(1934)で歌謡をもって、内台融合と国語普及の精神とを宣布し達成しようとしたように、当時、内台融合の問題は確かに台湾統治上の大きな問題であった。

彌生子も内台の融合問題に目を付けた。彌生子は大稲埕、龍山寺という本島人の居住地域には内地人がなかなか入らないことに気づく。あるいは、「鳥の叫ぶような」台湾語と、周りの人たちが一言もわからない言葉で話していることから、強く異文化性を感じたりしている。また、蕃地で台湾に来てすでに 15 年経つ内地人のおかみさんに出会って、そこで、「私は知本から乗りあつて大麻里で降りるまで、だまりきつて会釈一つしようとしなかつた二人の女たちをふと思ひ浮かべ、何か急に淋しい気がした。竜山寺の群集の中にあつた壁は台湾の到るところにあるのを、今更に見出したのである。さうだ、あの人たちは本島人であり、このおかみさんと私たちは内地

[20] その流れとして 1938 年に「アジアの子」という作品を『日本評論』に掲載した。「アジアの子」のほかに、また「北京雑報」、「日支文化の融合 如何にして知識階級の融合を図るか」、「日華文人の交驩」などの文章を通しても、具体的な融合方法を提出している。

臺灣大學學術期刊資料庫

人であつた。」(p.118)と彌生子は鋭く内台融合には問題があると感じ取る。

さらに、台南での女学校時代の友人との集まりで、彌生子はまた、本島人と内地人との隔たりに気づく。彌生子に言わせれば、夫人たちが待っていた料理屋は、坐って箸をとっていると、東京のそうした場所にいるのとほとんど変らなかった。しかし、台湾がすっかり東京であるのは、これらの夫人たちの周囲だけに過ぎないと指摘した。もう一つの理由はこの宴会では、近くに住んでいる女学校時代の本島人の友達を一緒に招かなかったからである。「むしろ、台湾があまりに台湾であり、四十年たつても日本と台湾は厳然と別であり、言い換へれば、内地人と本島人との生活になんらの融合もないのに驚いてゐた。」(p.129)と本島人と内地人との隔たりに気づいて、驚いた気持ちを明確に表した。そして、霧峰の林献堂邸に案内され、次男の林猶龍と会った際、台湾人のルーツの話で、林氏が自分たちの出身地は福建だと答えたことを受け、彌生子は「一般に本島人と呼ばれてゐても、血をたどれば支那人で、それも広東と福建の移住民であるが、あなたのお家はどちらですか、とO氏がたづねたら、福建ですと答へた。その調子が、丁度東京に集まつてゐる諸諸方方の出身者が、お故郷は、ときかれて、和歌山県ですとか、宮城県ですとか返事するのとそつくり同じなのが、私をひそかに驚かした。」(p.149)という感想を述べた。その驚きの理由は、施政四十年の記念として、盛大な博覧会の開催まで行ったものの、台湾と日本との間の懸隔はこのようにも大きいのかと実感したことによるものであろう。

また、原住民の場合にも融合問題が残っていると彌生子は読み取っている。例えば、花蓮港のアミ族の部落の「薄薄蕃社」の頭目の家を訪れる場面であるが、その家の主婦は麻の束にうつ向いたまま、一度も振り返ろうとしないため、「主婦としての、むしろ彼らの全種族の無意識的な、それだけ厳しい抗議を見つけたやうな気がした。」(p.113)と、彌生子はやはり敏感に周りの雰囲気に気を遣う。さらに、

臺灣大學學術期刊資料庫

「大頭目の姪」という段落では、台東のパイワン族の大頭目の姪で、台南の女学校を出て、公学校で教鞭を取っている女性を訪れたことについて述べている。日本名が加茂きみ子という彼女との談話から彌生子は次のような感想を持つにいたる。

> 彼女はその綺麗な薄い唇の一方の隅だけわづかに動かした。微笑にしてもあまりに幽かな影であつた。さう云へば彼女は一度も笑はなかつた。また澄んだ優しい声であつたが、訊かれないこと以外に話さうとしなかつた。
>
> (大頭目の弟にあたる)彼女の叔父に大武で雑貨の店をもたせるのも、彼女を女学校に送つて公学校を教へさせるやうにしたのも、すべて傲岸不屈の大頭目に対する当局の懐柔策であつた、といふ話から思ひ合せても、容易に笑はぬひとになつた美しい加茂きみ子を私は決して怪しまなかつた。(pp.120-121)

と、彌生子は当局の懐柔策の成果に疑問を抱いたようである。もう一つの例であるが、パーラン社は霧社事件の時は官憲の味方をしたため、当時の大頭目が亡くなった時に、埔里から郡守が出かけたほどの盛大な葬儀が行われた。しかし、喪主の息子はその日になると山中に逃げ込んでしまった。死は悪霊のしわざとして忌み、逃げたのである。「蕃社に例のない名誉ある葬ひも、息子にはありがた迷惑であったらしい」(p.147)という。わざわざこの点を取りだしたのも、当局と原住民との隔たりが存在することを指摘したかったからであろう。

以上述べてきたように、この旅で、彌生子は内台融合においてはかなりの問題点を抱えていることを実感し、驚いたり落胆したりしたようになった。そして、このように、多くのページ数を使って、各方面の例を挙げて内台融合における問題点を指摘したのは、多くの訪台した文化人の中においても珍しい例だと言ってよかろう。

(三)内地人の負け目

杉本幹夫は『データから見た日本統治下の台湾、朝鮮プラスフィ

臺灣大學學術期刊資料庫

リピン』[21]で、台湾の親日と韓国の反日の原因を探究している中で、多くの例を挙げながら、次のような結論を付けた。即ち、朝鮮は優遇され、台湾は冷遇されており、すべての施策は朝鮮が先行し、台湾はその後追いであった。特に地方自治、政治への参加の点では、高級官僚への登用を見ても、武力で制圧された台湾、平和裡に統合された朝鮮の差を感じる。しかし、なぜ、台湾は親日になったのであろうか。朝鮮人はプライドが高いからだという説もあるが、台湾人も 3 年に小乱、5 年に大乱と言われた民族であり、決して従順な民族ではない。そうであれば、その根本的な原因はどこにあるかといえば、それはむしろ経済に因するのだという結論である。即ち、台湾の、よく言われている親日の原因を追究すれば、統治時代の台湾の経済の良さは主な要素だという論点なのである。このような当時の台湾の経済の全体像についての紹介は本論文にとっては、示唆的な情報になっている。しかし、実際に訪台した文化人はまた何を見て来たのであろうか。

彌生子はの場合では、彼女はまず征服された本島人がすべてにおいて負けているとも限らないと指摘した。例えば、商売の面では、台湾人が勝るところが多いようだとする。阿里山での見物においては、案内役の X 氏の話によれば、木挽でも、木登りでも、もとは内地人でなければ出来なかったのに、今では本島人がすっかり腕を捲えあげ、内地人は監督のような仕事しかしないという。そして、台中の店で台湾に来て 25 年のおかみさんからも、商売がだんだん難しくなり、本島人が安い生活費を強味にして溜めこみ、内地人の店や仕事に食いこむなどの話を聞かされた。 その後、知事官邸での食事で、また、一人の老官吏から内地人と本島人との、小資本に基く商売争いの話について、「台湾では総督さんと女髪結ひよりほかには、日本人はもう要らなくなりましたよ。」(p .151)という話も聞かされた。

[21] 杉本幹夫「台湾の親日感、韓国の反日感は何に起因するか」(『データから見た日本統治下の台湾、朝鮮プラスフィリピン』、龍溪書舍、2005.6)

臺灣大學學術期刊資料庫

このような内地人と本島人の経済戦については、実は1929年に来台した徳富蘇峰も気づいて焦っていた。『台湾遊記』の「はしがき」で台湾に遊んで最も意外に感じたことの第三点は「内地人と本島人との間に於ける勢力が、餘りに不釣合である事。別言すれば、思つたよりも内地人の本島内に於ける経済的勢力の扶植が不足である事。」と述べ、「日本人の商売人」が「皆な困つている」のは、商売ではすっかり本島人にやられてしまったからである。徳富はさらに「矢張り滿洲に於て、支那人に負けてをります如く、台灣でも負けているので御座います。これはどうも甚だ困つた事で御座いますが、事實で御座います。」（十九「在住の人種と生活状態」）[22]と語っている。

この状況が起きた理由については、徳富は本島人は生活費が安いため、「薄売多売」で商売をしているからだと指摘した。そのほかに、『植民地台湾の日本女性生活史—大正篇』を著した竹中信子[23]によれば、朝鮮と比べれば、内地人にとっては、台北の方が住みにくいという。しかし、台湾は環境に恵まれ、楽園であるはずなのに、なぜ、朝鮮に及ばないのであろうか。その原因は、台湾人が経済発展を第一任務にして、勤勉に働き、物質への欲求も低く、物を安く売って、内地人の経済を不安にさせてしまうことが一つである。もう一つは、内地人同士が互いに競争し、さらに台湾に来て勤勉という初心を失ったからであるという。例えば、豆腐屋は内地では、当然、早朝から仕事を始めたのであるが、台湾に来て、大変な仕事はすべて台湾人にさせて、自分は台湾人を顎で使って仕事させるような尊大な態度になっているからである。即ち、内地人は台湾では危機感を失ってしまったのだという。

以上の徳富蘇峰、竹中信子たちの分析と比べれば、彌生子はその原因を理知的に分析しながら、特に本島人の知恵と腕を讃えている。

[22] 徳富猪一郎『台湾遊記』昭和4.7、民友社。日記風の遊記が50篇があり、また、20編程度の見聞、感想文を元にした「台湾所見」という紀行文集も収録されている。

[23] 竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史—大正篇』(現代アジア叢書、1996.10)

臺灣大學學術期刊資料庫

一つの例を挙げよう。台北の大稲埕の経済状況を紹介している中では、台湾の民衆が自分達の知恵で生活を巧みに営んでいるから、豊かな経済状況になったのだと分析したりした。この、本島人の経済生活に対する肯定的な見方は、後の「土に生きる」という作品からもうかがえる。それによれば、台湾の農民が如何に豊かで、内地人の商人等の生活がいかに惨めに敗退しつつあるかを台湾の旅行中いたるところで耳にしたが、何よりまず土にしがみついて生きているものの力強さを感じさせられた。さらに台湾の農民が勤勉で、大家族制度で労働力が十分なせいもあるからだという[24]。このように、短い旅の中で、観察したり、周りから情報を集めたりすることを通して、彌生子は鋭く内台における経済的な問題点を見出した。そして、この中から、前述したような「各々の民族、各々の国家に他の追従を許さない特長と優秀がある」という彌生子のヒューマニスティックな暖かい眼差しも感じ取れるのであろう。

（四）婦人の問題

それから、もう一つ彌生子の個人の生活理念を存分に表した記述もある。それは婦人の生活面でのあり方についてである。

> 臺北の街を歩いた時、先づ目についたのはハイヒールで鋪道をける本島人の若い娘達です。彼女等は今は全く保守的な、種々な因襲から開放されたものゝ様に見受けられます。その素振りのあまりに鮮やかなのに眉を思はずひそめた位ですが、彼女等が一度他家に嫁入りした時は、一家の貞淑な主婦として静かな歩みにすぐになり得るものでありませうか。
>
> 内地人婦人の經濟的觀念のない事を、種々の人達から聞かせられましたが、消費のみを知る生活が、如何に危險なものであるかを知らなければならない。幸に臺灣は充ち溢れて全べてのものに惠まれて居るが、私達は、枝ばかり大

[24] 「土に生きる」(『読売新聞』1935.11.19)

臺灣大學學術期刊資料庫

きく榮えて根から案外深くないと云ふ様な生活ぶりをしたくないものです[25]。

この記述から当時の本島人・内地人女性の振る舞いの一面がうかがえると同時に、彌生子の、婦人の在り方への主張も充分に理解できる。これは彌生子自身の中流知識階級家庭の主婦としての自律的な生活態度の反映であろう。しかし、と同時に、このような婦人に対する要求は国の発展の事を意識したからだと言ってよかろう。「婦道」[26]という作品で、彌生子は女性の生き方と家庭、社会及び国家での役割などを詳しく述べる。即ち、女と生まれてもっとも女らしい立派な、美しい、徳操を身をもって実践することが同時に、日本人としての大道に合致するものでなければならない。優しいとともに、極度に強く、逞しくならなければならない。家を守り、子女を教育するとともに、隣組や町会の事業に欣然と参加しなければならないと主張した。さらに、「私たちの新しい婦道は、単に私たちだけの婦道であつてはならない。私たちの日本が今日の東亜に於いてもつてゐる輝かしい地位が、共栄圏の国々を軍事的に、外交的に、政治的に経済的に当然指導しなければならないやうに、それと相伴って、これらの諸国の婦人たちの前に、よい先覚者として立たなければならない役割が私たち日本の婦人に課せられてゐる。」[27]と、婦人の役目に大いに期待しているようである。即ち、このような、台湾で本島人の女性と内地人の女性の振る舞いを見て、不安がってしまう原因は、内台融合の問題と経済摩擦の問題と同じように、祖国日本の発展への懸念によったものであろう。

四、おわりに

彌生子の台湾行きの時期は第十六代の中川健蔵総督・平塚廣義総務長官の時代(1932.5−1936.9)であり、また満州國樹立によった国際

[25] 同注 15。
[26] 「婦道」(『野上彌生子全集』第II期第二十九巻補遺 2、1991.8)
[27] 同前注 pp.98-99

臺灣大學學術期刊資料庫

情勢の緊迫化及び 1932 年に起きた五・一五事件による国家非常時体制になった時期でもある。このため、中川総督の対処も、台湾統治の実績を挙げるには官民一致して、一層の覚悟と努力でその任に当たる必要があるというように、おのずと台湾統治の実績を強く示そうという意欲に満ちていた。このような時期に台湾に赴いた彌生子はこうした事情を知ってかしらずか「始政四十周年」記念行事としての博覧会の内容にはほとんど触れなかった。その代わりに、原住民の生活、内台融合、内台経済の摩擦及び内台の女性の振る舞いなどの生活状態にかかわることに莫大な関心を寄せている。

全体から見れば、彌生子は極めて暖かく、ヒューマニスティックに台湾を見て来た。特にこのヒューマニスティックな振る舞いの中には、前述したような、各々の存在及びその本来の価値を肯定すべきという理念が存することが特に看過できない。ただ、彌生子がこのように真剣に植民地の台湾の内部の真相に目をつけたのは、ほかにまた理由があるのであろうか。

前述したような、総督府の施政への仄めかした指摘や講演を通しての内地人への呼び掛けや「婦道」などの作品を通しての家庭、社会、国への懸念などは、彼女の、祖国の日本の発展にとっては、台湾の統治と経営がいかに重要かという考えとは繋がっているようである。さらに、この旅の最後に、南から台北に帰りついて、宿にしている長官官邸のうしろにある博覧会の演芸会の鳴物が聞こえて来た時、「日本の植民政策の四十年の結果を、その騒ぎが私に新らしく思ひ廻はさせ、帰途に、もし出来たら朝鮮から満州も見て来たい願望に激しく捉へられた。」(p.151)というように、満州からも自分の国の姿を探し出そうとする願望が見える。また、台湾の旅の翌年の 1936 年にローマ大学へ留学に行く長男素一への手紙の中で、「人間はよい反省を持とうとする場合には、自分を離れて考えなければならないのと同じように、自分たちの社会や国に対しても、そこから離れて見た時に初めて正しい認識が持てるのです。昨年秋の私たちの台湾旅行が何を母さんとあなたに教えてくれたかを考え

臺灣大學學術期刊資料庫

てみれば、容易にわかるでしょう。私たちは、日本の姿とその付属地(植民地)である台湾との微妙な結びつきを、ちょうど家を垣根の外からながめたように、初めてはっきり見ることができたのでした。」と、祖国日本の姿を外国から客観的に見つめるべきだと励ました[28]。　以上見てきたように、彌生子の台湾に対する情熱的な真剣な眼差しが出来たもう一つの理由は、まさに日本祖国に対する意識を強く持っているからなのではなかろうか。

【テキスト】

野上彌生子（1980）「台湾」『野上彌生子全集』第十五巻　岩波書店
野上彌生子（1980）「海外からの便り　香港」『野上彌生子全集』第十六巻　岩波書店
野上彌生子（1991）「書簡」『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二十四巻　岩波書店
野上彌生子（1991）「婦道」『野上彌生子全集』第Ⅱ期第二十九巻補遺 2　岩波書店

【参考文献】

「野上彌生子女史の座談会」(1935)『台湾愛国婦人新報』
蓮池親子(1935)「野上彌生子女史は台湾を斯う視た」『台湾婦人界』
『台湾日日新報』（1935.10.24-11.8）
「蕃童」（1935.11.7）　『読売新聞』
「土に生きる」（1935.11.19）　『読売新聞』
始政四十周年記念台湾博覧会（1939）「始政四十周年記念台湾博覧会誌」国会図書館　デジタル資料
佐多稲子(1978)「台湾の旅」『佐多稲子全集』第三巻　講談社
瀬沼茂樹(1984)『野上彌生子の世界』岩波書店

[28] 『作家の自伝 44　野上弥生子』日本図書センター　p.103

臺灣大學學術期刊資料庫

陳藻香(1991)『野上彌生子の台湾観-紀行『台湾』を中心に』東呉大学日本文化研究所
竹中信子(1996)『植民地台湾の日本女性生活史－大正篇』現代アジア叢書
佐伯彰一監修(1997)『作家の自伝 44　野上弥生子』日本図書センター
岩淵宏子編(2005)『はじめて学ぶ日本女性文学史・近現代編』ミネルヴァ書房
杉本幹夫(2005)「台湾の親日感、韓国の反日感は何に起因するか」『データから見た日本統治下の台湾、朝鮮プラスフィリピン』龍溪書舎
石月静恵(2005)「知識人女性の台湾訪問と台湾認識」桜花学園大学人文学部研究紀要　第 8 号
黄翠娥(2010)「佐藤春夫の批判精神－日本統治時代の台湾ものを中心に－」『日本語日本文學』第 35 輯 輔仁大学日本語文学科
陳萱(2011)「野上彌生子の植民地台湾の旅−感覚描写と通じた台湾認識--」『比較文学研究』96　東大比較文学会
渡邊ルリ(2013)「一九三五年の台湾と野上弥生子−花蓮・大武の公学校教師との出逢い」『戦間期東アジアの日本語文学』勉誠出版
黄翠娥(2017)「徳富蘇峰の眼差しと台湾の記憶--『臺灣遊記』をめぐって」(『台大日本語文研究』 33　台湾大学日本語文学科

臺灣大學學術期刊資料庫